第846号 平成27年11月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日　第三種郵便物認可

2015年（平成27年）
11月号（No. 846）
公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
会員の会報購読料は年会費に含まれています
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

ネパール・ヒマラヤ東部の未踏峰 ジャネⅡ峰に全員初登頂

昨年秋のムスタン女子登山隊のマンセイル峰（6242m）初登頂に続き、JAC学生部男子登山隊がネパール東部、チベットとの国境付近に位置する未踏のジャネⅡ峰（6318m）に学生たちだけで挑戦、見事全員初登頂を果たした。

日本山岳会学生部　ネパール東部登山隊2015

目標：DzanyeⅡ（ジャネⅡ峰）およびLhonak peak（ローナク・ピーク）の初登頂
期間：2015年9月3日～10月23日
隊員：学生部所属学生6名
隊長＝真下孝典（青山学院大学山岳部、21歳）
登攀隊長＝宮津洸太郎（明治大学山岳部、24歳）
会計＝木村健太（東京工芸大学山岳部、21歳）
医療＝芦刈新之助（電気通信大学ワンダーフォーゲル部、22歳）
通信＝橘井駿（専修大学山岳部、20歳）
輸送＝野澤岳大（立正大学探検部、20歳）

この登山隊は日本山岳会創立110周年にあたり、学生部で企画されたものです。2014年2月から海外登山研究会を発足し、ネパール・ヒマラヤはもちろんのこと、世界中の山を対象として検討し、その範囲は南極圏にも及びました。その研究会に集まっていた女子学生の一人がメンバーを集め、ひと足先に女子学生のみによる登山隊が編成されました。それが2014年秋のムスタン登山隊であり、その登頂成功は会員の皆様もご承知のことと思います。女子隊の成功を受け、その成功から遅れること1年の2015年秋に、この遠征を実行に移すことができました。

この登山隊の発足は、隊長である私、真下のひと言で始まりました。私は大学山岳部入部以降、日本山岳会学生部の例会に1年生のときから出席し、前回の学生部遠征であるザンスカールの成功も目の当たりにしていました。そのころから海外登山への憧れを持ち続けてきました。幸運なことに私の母校・青山学院大学山岳部による海外遠征が2013年にあり、登頂メンバーではなかったものの、一隊員としてネパール・ヒマラヤを体験することができました。そのことを経て、私の中では「海外登山を現役大学生のみの手で行ないたい」と思うようになりました。これがまさに今回の遠征において実現することとなったのです。

今回のメンバーは、学生部所属の学生ということで募集をかけました。しかし、最初の研究会段階では20名近くの参加者がいたものの、最後まで残ったのはこの6人となりました。最後まで私を信じてくれ、この個性豊かな頼れるメンバーが、各々の特性を活かしてこの遠征を成功に導いてくれたこ

目　次

ネパール・ヒマラヤ東部の未踏峰
ジャネⅡ峰に全員初登頂 …… 1
緊縮財政に向け定款を変えよう …… 4
YOUTH CLUB 活動レポート …… 5
壮絶な「死の地帯」を映像で再現した
映画『エベレスト 3D』…… 6
山研管理人1年目を終えて…… 7
「山の日に向けて」山を考える⑥…… 8
東西南北…… 9
活動報告…… 10
　資料映像委員会／山行委員会
新入会員…… 11
支部だより…… 12
　関西支部
図書受入報告…… 14
図書紹介…… 15
会務報告…… 16
ルーム日誌…… 18
会員異動…… 18
INFORMATION …… 18
編集後記…… 19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月・火・木……10～20時
水・金……13～20時
第2、第4土曜日……閉室
第1、第3、第5土曜日……10～18時

ジャネⅡ峰山頂から南側のパノラマ。左の巨峰はカンチェンジュンガ、中央はクンバカルナ（ジャヌー）

とに感謝しても感謝しきれません。今回の遠征企画段階で私が感じたことは、現役大学生の自主性の欠如という問題でした。研究会に参加しても、自分で山域研究もせず、他人が進めてくれる計画の話を聞くだけで、自ら登山隊を形作っていこうとしない姿勢をとる人が大多数でした。そして、多くの参加者が登山隊の計画が遅々として進まないこと、彼らの立場からすれば「進めてくれないこと」に文句を付けてやめていきました。非常に残念なことですが、これで良かったと思っています。そもそも自分で登山隊を作っていこうとしない人たちに、遠征に行く資格はありません。それだけでも、今回のメンバーは十分な基本的資質を具えていたと言えるでしょう。

この登山隊では、ネパール北東部のチベット・ネパール・シッキム国境付近のエリアを目指しました。地域的には、８０００ｍの高峰カンチェンジュンガを含む国定公園内になります。そのエリア内から２０１４年春にネパール政府によって解禁された未踏峰のうち、今回の２座に目標を設定しました。その理由としては、そもそもこのエリアには、私自身が青学遠征隊で足を踏み入れたことがあるということが第一に挙げられます。その前提で、このエリアから標高６０００ｍ以上の山で、実際に未踏の山を探した結果がこれら２つの山でした。

今回登頂に成功したジャネⅡ峰ですが、ジャネⅠ峰の方が古くから知られており、１９４９年にスイス隊によって初登頂がなされています。しかし、このジャネ峰周辺自体がほぼ人跡未踏の地であるため、多くの地図に誤りが見られ、かのエリザベス・ホーリーさんのヒマラヤン・データベースにおいても、ジャネⅠ峰の位置には二通りの説が表記されています。今回は山の断定にあたり、ネパール政府発表の測位データを基にグーグル・アースでその位置を特定し、その位置に最も近いピークをジャネⅡ峰山頂としました。現地でもＧＰＳを持って行動し、政府発表のデータ上は正しい位置と断言できると思います。

また、もう一方のローナク・ピークは昔から６０７０ｍピークとして多くの地図で確認でき、青学遠征隊のときにもおおよその位置と

写真を手に入れることができていたので、こちらはスムーズに確認ができました。付近をスロベニア隊が通っていることが判明していますが、ピークに達したという記述も見られず、ルート的にも明らかに異なることが調査の結果わかりました。

　実際の行程に関しては報告書で詳述することになりますが、簡単にまとめますと以下のとおりです。

【行動概要】

9月3日　日本出国。クアラルンプール経由で同日、ネパールの首都カトマンズ入り。

9月4日～6日　カトマンズでの準備。

9月7日～8日　カトマンズから陸路でバス最終到達地点タプレジェンに移動。

9月9日～　キャラバン開始。

10月4日12：05　ジャネⅡ峰初登頂成功。

10月15日　カトマンズ帰着。

10月22日　ネパール出国。翌23日に日本帰国。

　目標のジャネⅡ峰とローナク・ピークは前述のとおり、ネパール北東部のネパール・チベット国境付近に位置します。そのため、首都カトマンズからそこに至るための行程が非常に長いのが特徴です。隊の荷物があるので、首都カトマンズからバスを1台チャーターし、すべての荷物と隊員、ネパール人スタッフを乗せて、陸路を進みます。目的地はカンチェンジュンガ国定公園の玄関口で、車で入れる最後の町タプレジェンです。途中、カトマンズから南下し、ネパール南部を占めるタライ平原を走り、また北に向けて山を登っていくという経路をとります。ここではネパール憲法制定に伴う対立で、タライ地域がゼネラル・ストライキを起こしており、日中の行動が制限されて夜行バスとすることを余儀なくされました。

　タプレジェンの町からポーターを雇い、集落として最後となるローナク村までのキャラバンとなります。高度順化を含めて9日間かかり、標高1700mのタプレジェンから1200m地点を通り、4700mのローナク村を目指します。低い所から徐々に高度を上げていくので順化には最適ですが、行動が長く、体調を崩してしまうリスクをはらんでいました。

　最終集落のローナク村からは、キャンプを設営しつつ山頂を目指します。我々は途中に、2座のためのそれぞれのベースキャンプと、その中間に設けた中継キャンプ、ジャネⅡ峰アタック用のキャンプの計4キャンプを設営しました。ローナク・ピーク→ジャネⅡ峰の順に登る予定を立て、ローナク・ピーク敗退後にジャネⅡ峰ベースキャンプに入るという手順を踏みました。学生部登山隊の原則として、ベースキャンプ以降はガイドなどの手を借りないというものがあります。そのため、ベースキャンプ以降は学生の手で荷揚げし、キャンプを設置し、氷河を登って頂上に立ちました。

頂上の肩にあたるプラトーから見たジャネⅡ峰

　本遠征は学生だけの力で登山を成功させるという前提を掲げ、達成することができました。

　しかし、この学生登山隊の成果は、隊の裏側でさまざまな先輩方のご支援があったことで達成されたものです。このような登山隊をご支援くださった皆様に、改めてお礼申し上げます。

　ここで得た経験は日本山岳会学生部や各所属の山岳部で蓄積され、将来の登山に向けて受け継がれていきます。また、そうする責務を負っていると考えます。次世代の学生やわれわれ自身の今後の活動でそれが示していければと思います。

（真下孝典）

ジャネⅡ峰の全員初登頂を祝う隊員たち

オピニオン

緊縮財政に向け定款を変えよう

原　満紀

今年の通常総会も出席者138名にて無事終了いたしました。新会長・小林政志氏をはじめとする新理事も承認され、今後のご活躍を大いに期待しております。

今回の総会に参加して、会員の減少が続き将来の緊縮財政が見え隠れするようになってきている現状を考え、この際思い切って定款を改訂しましょう、と会員諸兄姉に提案する次第です。

まずは当日配布された会員動向一覧表によると、平成12年に在籍されていた5990名の会員が、平成26年度の会員数によると5036名に減少しています。この15年間で954名も会員が少なくなってきています。この分では5000名の大台を割り込むのも時間の問題でしょう。そこで最近の傾向はどうなっているのかと思い、今年1月から6月までの「山」に掲載されている会員動向を調べてみました。結果は下表のとおりで、新入会員135名に対して退会者は物故者を含めて150名と、確実に増えているのが現状のようです。年々減少していく年会費収入に歯止めを掛けられる良い方法がないものかと思う会員は私だけではないでしょう。今回の会員動向のレポートを眺めていて、当然のこととはいえ永年会員の人数が次第に増加傾向にあることに気が付きました。リストによりますと永年会員の動向ですが、平成12年当時の会員数73名に対して平成26年度には347名と増え続けております。このこと一つをとっても、年々会費収入が減っていくのに反比例して、会費免除の永年会員は今後もどんどん増えていくことでしょう。

項目	1月	2月	3月	4月	5月	6月	合計
物故者	10名	4名	3名	3名	4名	7名	31名
退会者	―	8名	12名	65名	8名	26名	119名
復活会員	1名	―	1名	―	3名	―	5名
新入会員	11名	15名	17名	21名	46名	25名	135名
平均年齢	55.9歳	54.8歳	48.2歳	50.2歳	57.6歳	48.3歳	≒52.5歳

永年会員とは「本会入会後在籍継続50年に達した者」と定款に規定されており、さらに第7条にて年会費を免除されています。この規定は男性の平均寿命が60代のころに作成された代物であり、現在のように男性の平均寿命が80歳を優に超えている時代になると、多少大げさではありますが、将来は永年会員だけの会になってしまう可能性もあります。実際問題として、このままの状態で推移しますとやがては永年会員が1000名の大台を超して、会の運営に影響をもたらすことは目に見えてくるのではないでしょうか。

そこで、早急にこれに対する対策を講じる必要があると思う次第です。では、どうしたら良いのだろうか？　そこで提案ですが、永年会員の資格を取得した会員には現状どおりに記念品を贈呈して、年会費を6000円に減額して徴収するという新しい定款を作成すれば良いのではないでしょうか。永年会員がこの金額を負担したとすると、年額〒208万円の増収が見込め、昨年度の管理費の〒1／2を埋めることが可能になります。

さらに定款第6条2項に規定されている終身会員の項も同じことが言えます。規定では「入会後、10年以上在籍せる者」で「別に定める終身会費を納めた者」も年会費を免除されています。これらの会員も在籍年教と年会費とで精算し、完了された年度から同様に年会費を徴収するように改訂されたらどうでしょうか。リストによると終身会員が現在74名おられて、いますぐにではないですが、いずれこれも年会費が年額〒44万円の増収となります。そして今後、この終身会員の項は廃止としましょう。

定款第4章、第20条第2項に「定款変更の議決は総議決会員の3分の2以上に当る多数をもって行う。」と規定されています。この提案は、ぜひとも新執行部において必要議題として採り上げていただきたいと思います。

（東京多摩支部会員）

YOUTH CLUB活動レポート

WV部ステップアップ講座第1期が終了

YOUTH　CLUB傘下のワンダーフォーゲル部（以下、WV部）は、メーリング・リストの登録数では現在100名を超えている。しかし、積極的にWV部の山行に参加する人がいる一方で、月1回の例会にもほとんど顔を見せず、山行の呼びかけにも反応していない人が少なからず存在する。WV部の山行は一部のボランティア・メンバーが計画を立案し、リーダー役をこなしているが、その人数は少なく、100人を超えるWV部メンバー全員に魅力的な山行を提供できているとは言い難い状況である。

この状況を改善するために、昨年9月からリーダー養成を目的としたステップアップ講座を立ち上げた。WV部の中で希望者を募り、メンバーを固定して山行を実施することにより、実践での技術習得を目指した。集まったのはミッキー、サリー、モモ、モリリン、テラリン、コギーの6人（男1、女5）。講師はポール（私）が務めた。

年	日程	山域	工程概要	テーマ	参加者	講師
2014	9/19-9/21	剱岳	早月尾根～剱岳～弥陀ヶ原～称名滝	岩場通過、長行程	2	1
2014	12/14	奥多摩	源次郎岳～恩若ノ峰	読図、地形把握	3	1
2014	12/27-29	合戦尾根	合戦尾根～燕岳往復	冬山初級歩行	4	2
2015	4/5	奥多摩	川乗橋～川苔山～鳩ノ巣駅	読図、地形把握	3	1
2015	5/23	丹沢	沖ビリ沢遡行	読図、初級沢登り	5	2
2015	7/18-20	鳥海山	象潟口～七高山～祓川、祓川～七高山往復	計画立案、長行程、雪渓歩行	3	1
2015	8/22-24	黒部	室堂～五色ヶ原～平の小屋～黒四ダム	計画立案、読図	3	1
2015	9/20-22	越後三山	ロープウェイ～八海山～中ノ岳～越後駒ヶ岳～駒の湯	計画立案、岩場通過、読図、長行程	3	1

また、雪山や沢登りでは、青年部からもアシスタントをお願いした。当初計画では月1回の山行を予定したが、天候やスタッフの都合により8回を実施し、9月の越後三山縦走で終了した。

これまでのWV部活動を通してある程度の山行経験を積んできたメンバーではあったが、技術習得だけでなく、新たな気付きも含めて全員が短期間に経験を積み、大きく成長してくれた。今後はWV部の中心メンバーとしてリーダー役を担い、新入会メンバーの指導に当たってくれることと思う。

なお、10月からはメンバーを替えて、ステップアップ講座第2期が始まる。

（山田和人）

青年部、広島支部と交流

YOUTH　CLUB委員会では、昨年から、若手会員が頑張っている支部を有志が訪問して親睦を深めている。去年7月の四国支部訪問に引き続き、この10月の3連休に広島支部を訪問した。

飲み会こそが本旨と思っていそうなメンバーもいたが、山岳会の会員として山に登ったことは当然である。初日は鳥取県の大山に登り、2日目には小瀬川水系の赤ナメラを歩き、両日とも山行およびそれに引き続く宴会により、親睦を深めることができた。

高齢化の著しい日本山岳会ではあるが、若手会員は全国にいる。若手会員相互の親睦を深めることができれば、その若手会員にいい刺激となることはもちろん、支部の活性化につながり、ひいては日本山岳会にとっても良い効果をもたらすであろう。そのような動きの一助となるべく、これからも多くの支部を訪問したい。

（直江俊弐）

大山・弥山山頂で記念撮影

CULTURE

壮絶な「死の地帯」を映像で再現した映画『エベレスト 3D』

神長幹雄

世界最高峰であるが故に、これまで数々の感動的な物語を生み出してきたエベレストであるが、1996年の春もまた悲惨な大量遭難のために忘れられない年となってしまった。

ロブ・ホールが隊長を務めるアドベンチャー・コンサルタンツ隊（ニュージーランド公募隊）に、隊員の一人として参加した難波康子さんとは、亡くなる10年ほど前に冬の富士山に一緒に登ったことがあるし、直前の壮行会では原稿執筆を了承してもらっていた経緯がある。それだけにこの遭難はひときわ感慨深いものがある。

登頂アタックの5月10日午後、それまでの好天が一変して猛吹雪となり、登山隊に襲いかかる。隊員たちは荒れ狂うブリザードのなか、必死に最終キャンプへ戻ろうとするが、難波さんを含め5人の登山者の命が失われてしまった。その大量遭難の全容をドキュメンタリー・タッチの映画にしたのが、11月6日に公開された『エベレスト 3D』である。

今回の映画の原作はベック・ウェザーズ著の『生還』であるが、その前に出版されたジョン・クラカワー著の『空へ――悪夢のエベレスト1996年5月10日』（初版は文藝春秋、現在はヤマケイ文庫）がベストセラーとなり、また、遭難当時はマスコミでも大きく報道されていただけに、あの悪夢のような大量遭難を記憶されている会員も多いと思う。

映画はほぼ原作に忠実に展開されていく。登頂アタックの日、張られているはずだった固定ロープの不備、高所障害による隊員の体調不良、そして、ヒラリー・ステップでの順番待ちによる時間のロス、さらに酸素ボンベの不足など、予期せぬ事態がいくつも続く。遭難に至るそうした苛酷な現実を、映画は冷静にかつ忠実に再現しようと試みる。特にアイスフォールのルート工作やクレバスの通過、ヒラリー・ステップからの滑落の瞬間など、実にリアリティがあって、その映像の迫力にまず驚かされるに違いない。

『エベレスト 3D』より　©Universal Pictures

撮影はエベレストをはじめイタリア・アルプスのセナーレス氷河で行なわれたというが、3Dの効果もあってわれわれ観客を惹き付けて離さない。山岳映画、それも「デス・ゾーン」と呼ばれる苛酷な8000m峰を舞台にしているのだから、撮影もそれだけ厳しかったはずだが、エベレストの嵐の再現と滑落、生還の映像は圧巻であった。ただ、映像の迫力が勝っていただけに、隊員一人一人の細やかな心理描写には、よりいっそうの配慮が欲しかった。

今回の大量遭難には考えさせられることが多かった。公募登山隊が大衆化の道を歩み始めた矢先の大量遭難であり、また、高所シェルパの登山技術の格段の向上、高所での通信機器の普及、とりわけ最近の気象情報の精度の向上など、エベレストを取り巻く登山事情は大きく変化した。1996年の大量遭難が、そのすべての契機であり、象徴であるような気がして仕方がない。

難波さんとのあの冬富士登山や壮行会での彼女の笑顔。そして事故当日の、隊長でありながらクライアントを登らせることを優先させたガイドの判断、嵐の8000m峰でのガイドの役割とレスキューの限界など、映画『エベレスト 3D』はいくつもの問いかけを提起する。エベレストとは、生死が紙一重の高所登山とは、ひいては高所レスキューのあり方と人間の尊厳とは……。さまざまな想いが錯綜し、多くのことを考えさせられた映画だった。

＊『エベレスト 3D』TOHOシネマズ日劇ほか全国公開中

さんけん通信

山研管理人1年目を終えて

元川里美

小春日和のぽかぽか陽気に恵まれた11月1日、上高地では山岳研究所の扉が閉じられ、周辺の施設よりもひと足早く冬の眠りに就きました。山研委員さんをはじめ信濃支部長、神奈川工科大学と信州大学の学生さんなど、大勢の方々の手によって冬支度を整えられた山研は、すっかり落葉した樹々に囲まれて少しばかり寂しげに、でも、どこか安堵した様子で私たちを見送ってくれました。冬枯れた風景を背景にしたそのたたずまいは、開所当時の春の日の喧騒と躍動感を想起させ、ひとしきり、しみじみとこの半年を振り返ってみるのでした。

約７００名の会員さんたちに利用された今シーズンの山研は、ゴールデン・ウィークに合わせて4月25日に開所しました。記念すべき第1号の利用者となってくださったのは、四国からの2名の会員さんでした。聞けば、翌日にコブ尾根経由で奥穂を目指すとのこと。積雪期のバリエーションねらいとは、さすが日本山岳会、と最初から圧倒されつつ、ひとシーズンを山研で過ごしながらこのような山の猛者を迎えられることが、とても頼もしく誇らしく思えました。

窓の外が瑞々しい新緑と小鳥たちの囀りで賑やかになってくると、ウェストン祭を皮切りにグループでの利用が増え、あるときは支部主催の登山教室であったり、またあるときは山仲間との定例会であったりしました。気の置けない仲間とのたわいない会話は、はたで聴いていてもそれは楽しげで、一緒にテーブルについて輪に加わることもありました。

「戸袋の管理人」として親しまれているヘビとの初対面も、暖かくなり始めたこのころでした。自由気ままな彼は、ゴロゴロとテラスで日向ぼっこをすることもあれば、器用に階段を降りては散歩に出かけることもありました。自分以外にこの建物の中に命が息づいているという確かさが妙に嬉しくて、姿を見ない日には気になって戸袋をのぞいてばかりいました。

日常の施設管理については、飲料水の取水や水力発電といった慣れない水の管理に、しばらくは一日の多くの時間を積極的に費やしていました。長年、山研が取水してきた善六沢は、沢崩れにより雨のたびに泥水が混ざるようになっているので、内野さんから引き継いだとおりに、雨天時には昼夜を問わず裏の水槽へ足を運んで、濁りのチェックを行ないました。

水源への道なき道はまさに自然の楽園でした。林床の小さな植物たちは人知れず可憐な花を咲かせ、沢水に洗われるハンノキの幹からは、まるで触手のような赤い根が幾本も伸びて、ほとばしる滴を受け止めていました。山研で水の管理をするということは、とりもなおさず自然と対話することでしたので、梅雨明けと同時に水道工事が終わり、決して濁ることのない清水川に取水が切り替わったときには、もちろんほっとした気持ちもありましたが、水の声に耳を傾ける必要がなくなってしまうことに一抹の寂しさも覚えました。

夏休みが近づくころになると気持ちにも少し余裕が出てきて、利用者の少ない日には本棚に並んだ書籍にも手を伸ばすようになりました。ファイルに綴られた各支部報は、全国での活動の詳細が記録されていて特に興味深いものでした。なかでも信濃支部報は、槇有恒支部長時代からの会報が一冊にまとめられていて、ページをめくると山研に関する貴重な記述も発見でき、地元の先輩方の手によって大切に守られてきた山研の歴史に触れて、おのずと身が引き締まりました。

上高地に慣れているとはいえ、私一人で山研に常駐ということで、この半年間、関係者の皆様にはいろいろな意味でご心配をおかけしていたことと思いますが、ＪＡＣの大切な財産である山研の管理を思い切って託してくださった方々と、折に触れてさりげなく励ましの言葉をかけてくださった地元の方々、そして、今シーズン山研に足を運んでくださった会員の皆様に、心よりお礼を申し上げます。

これから半年間の休眠期間を経まして、また来春からはこの紙面をお借りして、上高地の澄んだ空気と山研の魅力をお届けする機会をいただければと思っております。

「山の日に向けて」山を考える⑥

「木の国」日本の山の恵み

永田弘太郎

日本は「木の国」「木の文化」と言われている。

法隆寺や姫路城、あるいは古民家などの木造建築は世界的にも類を見ない文化遺産であり、われわれが住む戸建の住宅も、また日常的に使う食器や家具なども木で作られている。

古くから住居や農具、家具、食器などをはじめ、神社仏閣、城郭、橋梁などの大規模な建造物も木によって作ってきた。また、食料、エネルギー源（薪炭）、薬、紙などさまざまなところで木を利用し、依存してきた。いまでも寺社には神木が祀られ、盆栽を愛し、スチールデスクに木目模様を施す。木に親しみ以上のものを持っているようだ。

日本の山は一部の高地を除いて、ほとんどが森林で覆われている。知られていることだが、日本列島の3分の2が森林であり、森や山はきわめて身近な存在だった。先進国では希有な環境だ。

日本列島に森林が多いのは、温暖多雨なため樹木が育ちやすいからだ。加えて森林はそのまま山であって、開墾に適さなかったがために温存されていたのだろう。そして、日本列島が複雑な地形・地質であったため、亜寒帯から亜熱帯までの樹木が、また、樹木から苔に至るまでの多種多様な草木が混在していたことが、今日に至るまで森林が利用され続けてきたことの大きな要因と考えられる。

日本列島という小さな島の中で、針葉樹、常緑広葉樹、落葉広葉樹が、地域的な偏りはあるものの混在し、身近に存在していた。針葉樹は生育が早く、軽くて軟らかく加工しやすいため建築物に利用され、広葉樹は硬く重く、種類が豊富であるため、食料、生活道具、薪などに利用されてきたのだ。

しかし、木にも限りがある。過度な伐採で山がはげ山となり、土砂崩れなどが頻発した記録が残っている。藤原京や平城京の建設で田上山地がはげ山となったり、鉄や塩を作るため中国・四国地方の山がはげ山となった。都市が発達し人口が増えるにしたがって、荒廃する山も増えていく。江戸時代になって植林が行なわれるようになったが、太平洋戦争などによる乱伐もあって、日本列島に緑が戻ったのは、化石燃料や化学肥料が普及した戦後のことである。

いまは有史以来、最も緑が多い時代だとも言われている。

現在、輸入材の影響で国産材の需要が激減して価格が低迷したため、収穫期に入った森林が伐採されないで放置されている。そのため山林は荒廃し、スギ花粉被害や土砂災害のリスクを増している。人工林だけでなく、里山の雑木林も人手不足で手入れがされなくなった。シカなど野生動物による被害も増えている。

最近は関係者の努力や中国の木材需要の高まりによって、国産材の需要は回復してきているようだ。

しかし、いまの日本に「木の国」を探すことはやたすくない。住宅の木造比率は高いものの、木質ボードで柱を隠すような工法はとても「木の文化」と言えるものではない。「木の文化」の復権が唱えられているが、道はまだまだ遠い。

「山の日」メモ

10月末の日曜日、栃木県の塩谷町で行なわれた「ふるさと高原山を愛する集い」に私もゲストとして参加してきた。山おろしの風が少し冷たかったが、秋晴れに恵まれた。▼《「山の日」を今後のまちづくりにどう生かすか》をテーマにしたトークに、郷土の太鼓、獅子舞、歌がプログラムされ、家族やグループで楽しむバーベキューが人気を呼んで、芝生の広場に700人が集まった。▼高原山の集いは今年で3回目。山と森と裾野の農地、そして、清らかな水に恵まれた塩谷町の住民は「山の日」運動を生活に密着したところで受け止めてきた。森林保全の現場を歩いてきたボランティアのひとり（県の職員）が活動の中心になった。塩谷町は祝日「山の日」を提唱した作曲家・船村徹さん（当会会員）の出身地でもある。▼そんな高原山の一角が昨年、突然、福島原発事故廃棄物の最終処分場の候補地に挙がった。絶対反対の町民。今回の「愛する集い」はこの問題に距離を置くかたちで開かれたが、今後どう動くのか、しっかり見守っていきたい。

（成川隆顕）

西北東南

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします）

この父にして…
―宮下正美著作集―

慶応義塾大学名誉教授で独文学者、日本山岳会の知性を代表する一人であった宮下啓三氏が亡くなって3年が過ぎた。このたびご遺族から、丁重な書面を添えて啓三氏のご尊父の著書『宮下正美著作集』が図書室に寄贈された。

著者（1901～82年）は信州伊那谷に生まれ、飯田中学から慶応義塾大学を卒業、幼稚舎教諭を経て湘南学園園長を務めるなど、教育者である一方で児童文学者としても活躍された。

遺徳を偲んで故郷高森町から刊行されたのは、絶版になって久しい代表作3冊の復刻版と資料編からなる函入りの立派なもの。いずれも山村に生まれ育った少年の冒険談で、すべてが自身の体験に基づく作品だという。

●『山をゆく歌』（昭和33年　東都書房刊）

伊那の山奥、市田村の文太・荘介兄弟は、天竜川を挟んで赤石岳・荒川岳、左の塩見岳との中間にある鬼面山―落日のとき額から2つの目が真っ赤に輝くその山の話を東京のおじさんから聞く。残念ながら前山に隠れて鬼の顔半分は見えない。高い所に立てば、顔全体が見えるだろうと、兄弟は村の後ろの虚空蔵山・高森山に登るが、どこまで登っても鬼は怒った顔のまま。やがて悲しい顔に変わって日が暮れてしまった。いつか二人は、大人も恐れて近づかない「もっさり山」に迷い込んでしまったのだ。クサイチゴで飢えをしのぎ、途中でツキノワグマの子どもを拾うが、それを追いかけて来た母グマのお陰で山イヌの群れから逃れることができた。最後に植物学者の観察小屋に飛び込んで5日間の大冒険は終わった。

●『消えた馬』（昭和34年　東都書房刊）

夏休み。兄弟の家におじさんに連れられて豊彦少年がやって来た。村の子どもたちともすぐ仲良くなる。山の草刈り場から馬だけが草を背負って帰ってくる平和な村に、突如起こった馬泥棒騒ぎ。宙吊りになったケーブルから消えた馬たちの隠し場所を知った兄弟らの通報で、おんぼこ（子ども）乗馬隊がひそかに犯人を包囲する。泥棒たちは馬に飛び乗って逃げようとするが、馬は飼い主のひと声で逆に駆け戻ってきた。そのまま大人たちや駐在さんが待っている村へと向かう。

●『ふうちんと山犬』（昭和36年　東都書房刊）

東京に嫁に行き、災害で夫と赤ん坊を亡くしたおかよさん。村に帰って来たが盲目で淋しく暮らしている。そこへお守り袋を持った不二夫が訪ねてくる。孤児院で育った息子を迎えたおかよさんは、眼の手術をすることになる。

村で憎まれ者の山犬が、なぜか「ふうちん」にはシッポを振る。

ふうちんも山犬をかばって猟師の鉄砲の前に命乞いをする。おかよさんが退院する日、ふうちんは姿を消す。孤児院で知り合ったおかよさんの子どもは死んでしまい、訪ねて来たのはその友だちだった。フェニックスと名付けた山犬もかつては猟犬だったらしい。主人が事故で死んで野犬になっていたのだ。淋しい者同士が連れ立って山に隠れているとき、村の子どもたちは総出で行方を追う。帰って来た少年を、おかよさんは「わたしの子どもだ」と抱きしめ、山犬も一緒に暮らすことになる。

南アルプス、中央アルプスの往時の情景が描かれていて楽しい。

自然の中で真っ直ぐに育つ子どもたちの姿に心を洗われ、いくたびか感動の涙にくれた。この復刻版刊行の陰には地元の研究者・山田博章氏の力に負うところが大きい。各巻末に著者の足跡を訪ねた取材ノートが添えられている。それには教師としての正美氏の人柄や未来を託す子どもたちへの思いを聞き歩き、著者の体験がいかに作品に投影されているかを実証するとともに、宮下一家と慶応での恩師小泉信三氏や同郷の演劇学者河竹繁俊・登志夫父子との関係にも触れている。

啓三氏はスイスの伝説や「アルプスの少女ハイジ」の話をよくされたが、そのルーツは父から受け継いだ大自然への愛情だったかと思われる。亡くなる少し前の緑爽会の講演では鬼面山の話も出てきた。最後の入院直前の衰弱した体で、終始立ったままで講師としての務めを果たされた。教育者はかくあらねばならぬという信念を貫いた人でもあった。

読み終えて「この父にしてこの子あり」の感慨が湧いてくる。

（近藤　緑）

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

資料映像委員会

北海道の山岳画家・坂本直行の絵画が寄贈される

8月20日、故阿部恒夫氏（元会員8055、平成27年5月6日死去、85歳。死去以前に退会していたため本会の訃報は出されていない）所有の絵画が、保管者の岩田安生会員（11421）より寄贈された。

絵画は坂本直行（坂本龍馬が生まれた郷士坂本家の末裔）作、「冬の原野と日高連峰」（30・5㎝×39・5㎝、水彩画）である。絵画の入った段ボール外箱には、阿部氏の自筆で題名が書かれている。

上＞坂本直行作「冬の原野と日高連峰」
左＞坂本直行自筆の作品名

絵画寄贈には次のようなエピソードがある。本来の所有者であった阿部恒夫氏は北海道の清水敏一氏の世話でこの絵を入手したという。保管者の岩田氏は坂本直行の絵が好きだったので、山の友人であった阿部氏から借り受け、長いこと自分の部屋に掛けて楽しんだ。そんな岩田氏に生前、阿部氏は「必要なら差し上げる、不要なら日本山岳会に寄贈してほしい」と伝えていた。岩田氏は「自分が持っていてもこの先どうなるか分からない。この際、故人の遺志を尊重し日本山岳会に寄贈することとした」というもの。

岩田氏は絵画の額装まで済ませて寄贈してくださった。ボロボロだったマット紙を外部にて修繕した際、裏に坂本直行自筆の作品名が書かれていたので切り取り、それを新しいマット紙に貼り付けたという。作者はもとより、所有者、保管者それぞれの思いのこもった絵画である。

当委員会にて保管・管理、およびルーム展示などを行ない、多くの会員に見ていただけるよう準備をしている。

（奈良千佐子）

山行委員会

北ア・爺ヶ岳～烏帽子岳山行に参加して

集会（現・山行）委員会の山行に今回初めて参加させていただいた。とても緊張していたが、メンバーの温かい雰囲気にほっとする。

9月4日、初日は曇り空の中、柏原新道を登り、種池山荘にザック

を置き爺ヶ岳へ。中央峰、南峰に登り山荘に戻る。

２日目は好天に恵まれ、昨日隠れていた鹿島槍ヶ岳が朝焼けに染まった。富士山や南アルプスも見え、はやる気持ちを抑え出発。右側に劔岳がやけに大きく見える。鳴沢岳手前辺りから登山道はガレた感じになり、落石に注意して登る。今日のルートだけでも５つのピークがありアップダウンを繰り返す。ハードな所だけど展望に元気を貰い疲れない。赤沢岳に着くと黒部湖が見えた。スバリ岳を越え針ノ木岳に着くと槍ヶ岳が正面に見える。針ノ木小屋に泊まる。

３日目は蓮華岳を越え、憧れの船窪小屋に向かう。コマクサは名残の数輪が咲いている程度。蓮華岳からは砂礫の道をジグザグにだらだらと下り、途中から鎖や梯子が出てきて一気に高度を下げる。蓮華の大下りだ。コルでひと休みして北葛岳に向かう。七倉乗越を過ぎると梯子や痩せ尾根が現れ、滑らないように注意して歩く。降ったり止んだりだった雨が七倉岳に着くころには本降りとなるが、船窪小屋はもうすぐ。小屋に入ると暖かいお茶がサービスされ、囲炉裏の周りでほっとひと息。食事は山菜の天ぷらに生春巻き、野菜のマリネなど、とても山小屋とは思えない。びっしょり濡れた雨具を限られたスペースの中、朝までにすべて乾燥させてくれたスタッフの心遣いにも感動。出発のときも鐘を鳴らし、全員で見送ってくれた。「絶対にまた来る」と心に誓う。

４日目、ここが今回一番の難所。しかも天候が不安定。リーダーもギリギリまでエスケープするかどうか迷っていたようだ。前日までのハイマツの中の道と違い、ダケカンバなどの樹林帯を歩く。虫やキノコも多い。梯子や鎖が出てきたと思えば、すぱっと切れ落ちた崩落地の横を歩く。船窪岳から第２ピークの間に両側が切れ落ちた蟻の戸渡り的な所があった。慎重に歩き、不動岳を経て南沢岳に着く。急に視界が開け、白っぽい砂礫に岩がニョキニョキ、燕岳のような感じが烏帽子岳まで続く。時間が遅く、烏帽子岳は登らず小屋へ向かう。

５日目、希望者だけが小雨の中、烏帽子岳に向かう。山頂直下は鎖が出てきてスリリング。標識の上

の窓の所まで登ってポーズ。小屋で皆と合流してブナ立尾根を下る。アクシデントもあったがなんとか高瀬ダムまでたどり着きほっとする。タクシーで七倉温泉に向かい、5日分の汗を流し帰路についた。

今回の山行で北アルプス全山縦走を繋げる夢に一歩近づいた。来年はぜひ繋げたいと思う。山の収穫はもちろんだが、今回は心に温かいものをいっぱいいただいた気がする。メンバーの皆様に感謝！

（越智冒子）

委員会名称変更のお知らせ

平成27年9月より集会委員会は、活動実態に合わせ「山行委員会」と委員会名を変更しました。

これからも、「安全に楽しく全国の仲間と一緒に憧れの山に登ろう」をモットーに、各種山行を実施していきます。会員各位のご理解ご支援をよろしくお願いいたします。

山行委員会委員長　清登緑郎

支部だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

関西支部

関西支部設立80周年記念式典開催報告

1935（明治35）年9月1日に最初の地方支部として設立された関西支部は、本年80周年を迎えた。前回の70周年記念式典は高野山で行われたが、今回は神戸で開催した。神戸で開催したのは、日本を代表する都市山・六甲山は、明治中期以降神戸の居留外国人たちがスポーツ登山を開始した山であり、後に日本山岳会の創立を小島烏水に助言した、ウォルター・ウェストンが英国教会宣教師として、1889（明治22）年から滞在するなど、日本の近代登山の幕開けとなった場所でもあるからである。その後、在留外国人たちの登山活動の影響もあって神戸に多くの登山団体が設立され、六甲山系での登山が活発になったこと、関西支部設立の中心となったロッククライミングクラブ（RCC）の藤木九三さんたちが先鋭的な岩登りを始めた、日本の近代アルピニズム発祥の地でもあったからである。

5月30日、六甲山の麓にあるホテル北野クラブ六甲荘で開催された記念式典には、本部から森武昭会長、節田重節副会長、斉藤惇生・尾上昇元会長、村井龍一・橋本清元副会長をはじめとして、青森・秋田・群馬・栃木・東京多摩・千葉・静岡・信濃・東海・岐阜・福井・京都滋賀・山陰・広島・四国・北九州・東九州・宮崎など18支部、首都圏からの参加者を含め84名の会員の方々に参列をいただき、関西支部員79（うち会友5）名、招待者や会員外の参加者を含めると総勢176名という多くの方々の集いとなった。

午後2時30分開始の記念式典では、森会長からロッククライミングクラブ（RCC）、旧制高校、関西学生山岳連盟などの活躍とともに関西支部があったこと、時代の趨勢により1986（昭和61）年京都（現京都・滋賀）支部、1997（平成9）年広島支部、2012（平成24）年四国支部の分離独立や会員の高齢化による会員減少という衰退があっても、旺盛な登山活動や自然保護活動を維持していると祝辞をいただいた。

また、藤木祭を共催している、飛田典男・大阪府山岳連盟理事長、中西研一・兵庫県山岳連盟会長からは、少子高齢化が進む中での登山活動や安全登山啓発活動などで手を携えていくという、今後の活動の連帯を表明していただいた。

午後3時10分からは、兵庫県北「但馬が生んだ孤高の登山家、加藤文太郎と植村直己」と題してフォーラムを開催した。

第1部の「孤高の登山家　植村直己を語る」では関西支部員である元副会長の平林克敏さんの講演は、1970（昭和45）年、日本山岳会エベレスト登山隊の登頂者同士ということもあって植村さんの人柄や、植村さんを壮大な探検や冒険に駆り立てた内面について裏

話も含めて語ってもらった。植村さんの生き様はもとより、会社の発展を支えながら、いくつもの未踏峰の初登頂を成功させた平林さんの「情熱と行動」の熱き心も感じさるものであった。

第2部の『山の声～ある登山家の追想』＝原作：大竹野正典（「山の声」より）」は支部員でもある加藤芳樹さんの脚本・演出によるもので、2人の出演者（うち1名は加藤さん）とバイオリン、ギターによる朗読劇である。

『山の声～ある登山者の追想』は加藤文太郎の手記『単独行』を下敷きに、1936（昭和11）年1月、盟友・吉田登美久と2人で挑んだ槍ヶ岳北鎌尾根の遭難を描いた二人芝居。山に憑りつかれた男たちの人生の喜びや孤独を、力強い台詞で語る迫力あるものであった。これまでも六甲山上、加藤文太郎の生地浜坂、横尾山荘、松本山岳フォーラムでも上演されており、2009（平成21）年第16回OMS戯曲賞大賞受賞、2011（平成23）年3月MBSラジオでも放送されている。フォーラム終了後中庭に参加者全員が集合し記念写真を撮った。

午後6時30分、予定より30分早く祝賀会が開宴した。最初に支部在籍40年以上の長期在籍者（個人71名・4団体）のうち今回の祝賀会に参列された20人に感謝状と記念品が授与された後、斉藤惇生元会長の乾杯の音頭で宴が始まった。

参列者の喉があらかた潤った頃合いを見計らってリピート山中さんの歌とトーク「孤高の人……加藤文太郎の歌」が始まった。1960（昭和35）年神戸市生まれのリピート山中さんは、桂雀三郎withまんぷくブラザーズとしてメジャーデビュー。高石ともや氏に見いだされ、ソロシンガーとしての活動を本格化。2000（平成12）年、自作の『ヨーデル食べ放題』が大ヒットした体験派シンガーソングライターで、北アルプスや富士山の山小屋や山頂ライブも多いと聞く。氏の軽妙洒脱な語りと歌は、予想を超えた参加者で山小屋状態の宴席を和やかなものにし、予定の時間はあっという間に過ぎ去った。

翌31日、記念山行には107名が参加。藤木九三さんの命名されたロックガーデンコース（75名）は、高座の滝で藤木さんのレリーフを見ていただいた後、雨ヶ峠を経て七曲りから六甲最高峰に登った。東お多福山コース（13名）は、近年、関西支部が行なっている「東お多福山草原復元活動」の現場を見てもらい六甲最高峰に登った。北野町散策コース（19名）も、散策の後バスで一軒茶に移動し、ほとんどの参加者が六甲最高峰を踏まれた。事前の気象予報では降雨が予想されていたが、意外な好天で雨に遭うこともなくいい汗をかいていただき、その後有馬温泉で汗を流すことができたのはラッキーであった。

関西支部設立80周年記念事業は、記念式典・記念登山だけでなく、支部80年の歴史を振り返る80周年誌の編纂と、70周年の中央分水嶺踏査に引き続き行なった四国分水嶺踏査、近畿分水嶺踏査、続近畿分水嶺踏査のうち2009（平成21）年4月から2012（平成24）年12月までの4年間の縦走記録をまとめた、近畿分水嶺踏査報告書を発行した。また、2013年、平成25年1月から兵庫県・岡山県、兵庫県・鳥取県、兵庫県・京都府、大阪府・京都府、大阪府・奈良県、奈良県・和歌山県の県境を縦走する関西支部県境縦走を開始した。瀬戸内海から日本海へ、日本海から太平洋への海水をリレーしながら歩く約800㎞に及ぶ長丁場であり、やっと兵庫県・大阪府県境に到達したところである。2016年（平成28）年には、「日本山岳会創立110周年・関西支部設立80周年記念事業」として東ネパール、カンチェンジュンガ・エリアのナンガマリⅡ峰からⅠ峰（6547m）の縦走登山を予定している。

（重廣恒夫）

関西支部80周年記念募金

（2015年8月30日現在）

80周年記念事業へご寄付いただいた総額は600万円になりました。ありがとうございます。ご寄付いただいた方のご芳名を記載させていただきます（金額・入金日順）。関西支部80周年記念行事（5月末開催）へ多数の皆様に参加いただくと共に、募金も多くの皆様からいただき感謝しています。

（関西支部長代行　金井良碩）

100万円＝重廣恒夫　25万円＝髙木稔　10万円＝阪下幸一、城隆嗣、平林克敏、羽田英彦、大阪鋭鋒会、㈱ユニ・エンジニアリン

グ、大阪府山岳連盟　8万円＝宗實慶子、平井一正、小島一喜　7万円＝清瀬祐司　6万円＝中村久住　5万円＝松浦輝夫、中島隆、辻和雄、内藤正司、廣田猛夫、野口恒雄、魚津清和、村田かおり、金井良碩、秦康夫、山内幸子、岩崎しのぶ、久保和恵、森武昭、尾上昇、水谷透、村井龍一、新本政子、黒田紀代、金井健二、広瀬貞雄、斧田一陽、坂口三郎、中谷絹子、浦上芳啓、松仲史郎、橋本清、助川征、阿部淑子、今西邦夫、大西純子、㈱双陽社、クラブ雲峰、春名康男、タイセイ商事、匿名　4万円＝松田順次、井関正裕、井上達男　3万円＝大阪市立大学山岳会、尾野益大、中川委紀子、住吉仙也、神戸大学山岳部、甲南山岳会、酒井敏明、山本光二、宗實二郎、大阪大学山岳会、齊藤惇生、米本隆夫、山平靖、同志社大学山岳会、大阪府立大学山岳会、㈱成和製造所、京都大学学士山岳会、京都府立大学山岳会　2万円＝河野直子、野村珠生、前田正彰、山本義博、小寺佳美、安井康夫、広瀬健三、岩坪五郎、岩崎忠明、雨宮宏光、薦田佳一、田島聖子、小林京子、長田健三、竹尾宗和、田中祥介、鹿田勝、立野里織、岡田輝子、山田健、橋本圭之輔、石岡慎介、西尾俊子　1万円＝植西武司、髙田誠、茂木完治、久米久夫、大島康弘、川田哲二、轟昌一郎、平野征人、内田昌子、小林貢、伊原哲士、新井浩、木村裕一、藤本三樹雄、瀧由喜子、箕口一三、野村哲也、釘本武昌、戸島泰次郎、斉藤祐二、大西康郎、森沢義信、大津陸郎、須磨岡輯、桑田結、黒田守彦、塚崎義人、森岡裕之、中祖博司、高島法男、門田喜弘、宇都木愼一、西村政晃、山並久次、大島秀夫、和田豊司、古家浩、有本隆行、早田道治、川北昌博、内田喜弘、岡田米司、角橋通弘、岡田博司、井上達男、赤山伸夫、関戸京子、野村哲夫、田中文男、猪川誠、加瀬憲二、金澤康夫、長瀬美代子、岩井賢助、松村文子、平山善吉、上田修美、松波幹男、武庫川女子大学鳴松山岳会、大塚博美、明石貴雄、田中昌二郎、高田允克、田中壮佶、平井喜久枝、荻野昌宏、大塚宏國、岐阜支部、京都・滋賀支部、浅野清彦、黒岩敦子、青木昭、横山規江、岐部明弘、乾好、吉澤貢

（以上170名）

図書受入報告（2015年10月）

編著者	書名	ページ／サイズ	発行元	刊行年	寄贈／購入別
石川紀美（編著）	山の遭難書　:戦後篇（1）	699p／22cm	石川紀美（私家版）	2015	著者寄贈
柴田鋼志（編）	山　横浜山岳会会報　:1000号記念号	84p／26cm	横浜山岳会	2015	発行者寄贈
中井正則	登山の教科書　:山のトラブル体験入門	375p／19cm	幻冬舎	2015	出版社寄贈
田中正人・他（共著）	安全登山の基礎知識　:「山の知識検定」公認BOOK	168p／21cm	スキージャーナル	2015	出版社寄贈
早稲田大学山岳部（編）	早稲田大学山岳部アイランドピーク登山隊2015登山報告書	84p／30cm	早稲田大学山岳部	2015	発行者寄贈
学習院輔仁会大学支部山岳部（編）	阿弥陀岳遭難事故報告書	54p／30cm	学習院輔仁会大学支部山岳部	2015	発行者寄贈
石田正道	南山城 石仏の里を歩く　:木津川に沿って古道を歩き石造物をめぐる	176p／22cm	ナカニシヤ出版	2015	出版社寄贈
根深誠	ヒマラヤのドン・キホーテ　（中公文庫 No. ね-2-9）	372p／15cm	中央公論新社	2015	著者寄贈
山形県遊佐町教育委員会（編）	史跡鳥海山保存管理計画書　:平成23年3月 山形県遊佐町	202p／30cm	山形県遊佐町教育委員会	2011	鈴木正崇氏寄贈
齊藤壽胤・神田より子	鳥海山の信仰文化　:平成21年鳥海山信仰文化遺跡調査研究報告書	59p／30cm	秋田県にかほ市教育委員会	2009	鈴木正崇氏寄贈
鈴木正崇（監修）	日本の山岳信仰　:世界が注目する日本独自の信仰の姿（別冊宝島）	128p／26cm	宝島社	2015	監修者寄贈
滝本幸夫	私の中の深田久弥　:「日本百名山」以降の北の山紀行	239p／19cm	柏艪舎	2015	著者寄贈
日本山岳会三水会（編）	創立40周年記念誌　:公益社団法人日本山岳会三水会	125p／21cm	日本山岳会三水会	2015	発行者寄贈
佐藤勉・他（共著）	上信越国境山地の沢　:文献研究・未登の沢	52p／26cm	市川学園山岳OB会Ⅱ	2015	佐藤勉氏寄贈
深野稔生	てっぺん駆けた記　:月に臥し雲に眠る57編の山紀行	291p／21cm	白山書房	2015	出版社寄贈
C.ストレイド（著）雨海弘美（訳）	わたしに会うまでの1600キロ	384p／19cm	静山社	2015	出版社寄贈
伊藤正一	源流の記憶 伊藤正一写真集　:「黒部の山賊」と開拓時代	176p／24cm	山と溪谷社	2015	出版社寄贈
深田志げ子	私の小谷温泉　:深田久弥とともに	191p／19cm	山と溪谷社	2015	出版社寄贈
深田久弥	百名山紀行　:深田久弥選集（ヤマケイ文庫 上巻）	359p／15cm	山と溪谷社	2015	出版社寄贈
深田久弥	百名山紀行　:深田久弥選集（ヤマケイ文庫 下巻）	351p／15cm	山と溪谷社	2015	出版社寄贈
高桑信一	古道巡礼　:山人が越えた径（ヤマケイ文庫）	398p／15cm	山と溪谷社	2015	出版社寄贈
米倉久邦	日本の森列伝　:自然と人が織りなす物語（ヤマケイ新書 No.YS016）	350p／17cm	山と溪谷社	2015	近藤雅幸氏寄贈
Heichel, Wolfgang	Adolph Schelagintweit　:Ein Leben fur Die Wissenschft	160p／30cm	Wolfgang Heichel	2015	著者寄贈
Kielkowski, Jan	Nanga Parbat Group　:Monograph - Guide - Chronicle	257p／21cm	Explo	2015	著者寄贈
S.Jensen & Ed Douglas（eds）	The Alpine Journal　2015（Vol.119）	478p／23cm	The Alpine Club	2015	発行者寄贈
Dougald MacDonald（ed.）	The American Alpine Journal　2015（Vol.57 Iss.89）	400p／23cm	AAC Press	2015	発行者寄贈
Nandini Purandare（ed.）	The Himalayan Journal　2015（Vol.70）	324p／22cm	The Himalayan Club	2015	発行者寄贈

図書紹介

シェリル・ストレイド著　雨海弘美・矢羽野薫訳
わたしに会うまでの１６００キロ

2015年7月
静山社
四六判　382ページ
定価　1600円＋税

現在、日本でもロングトレイルが話題になっているが、本書はアメリカ合衆国のパシフィック・クレスト・トレイル（ＰＣＴ）を歩いた女性作家の紀行。

ＰＣＴはメキシコとの国境からカナダとの国境まで、シエラネバダ山脈やカスケード山脈を越えて歩く４２００㎞のロングトレイル。

著者はカリフォルニア州・モハベ砂漠からスタートして、オレゴン・ワシントン州境のブリッジ・オブ・ザ・ゴッズまでの１６００㎞を歩いている。

母の死と本人の離婚。愛する人たちとの別離によって喪失感にさいなまれた著者が、自分自身を取り戻すために選んだのは、全く経験のない、無謀な１６００㎞にも及ぶトレイル・ウォークだった。

旅の始まりは、アウトドア・ショップのレジで見かけた『パシフィック・クレスト・トレイル　カリフォルニア編』という一冊のガイドブック。だが、本当の始まりは、トレイルを歩くことなど想像すらしなかった、母の死を予告されたその日からだった、という。

クマやガラガラヘビ、ピューマに怯え、酷暑や積雪、渇きや飢え、退屈さに抗いながら、ひたすら歩く。人生のすべてを背負い込んだような重荷に喘ぎながらの、３ヶ月にわたる旅の悲喜こもごもが綴られている。その旅は、トレイルという苛酷な自然の中に身を置いて、自身の人生を反芻する旅だった。

やはりアウトドアズマンのそれとはひと味違う、女性作家ならではの紀行となっている。

「自ら道を切り開いて雪山を進むのは、ヘロインを打つのとは正反対の行為だった」と言い、「あれだけ多くを失い、奪われ、自分にも人様にも顔向けできないことをしてしまった私でも、無垢な美しさをたたえた自然のなかに身を置けば、無垢になれる気がした。原野は清澄で、その清澄さに私も包み込んでくれる――何でも疑ってかかる私が、このことだけはみじんも疑わなかった。」と述懐する。

そして、ゴールはコロンビア川に架かる「神々の橋」。「私は確かにやり遂げた、その事実だけを知っていれば十分だった。」と記し、自分の人生も、すべての人の人生と同じように、不可解で、後戻りできず、神聖なものだ、と。また、ＰＣＴは終わったが、人生の旅はまだ続く。すぐそこに、目の前に、自分自身の人生がある、と。

「どのような荒野（ワイルド）が広がっていても、私は人生に身をゆだねる。」と綴り、筆を擱いている。

ちなみに原題は『ＷＩＬＤ』。

（節田重節）

会務報告

平成27年度第6回(10月度)理事会議事録

日時　平成27年10月15日㈭19時00分～21時15分

場所　集会室

【出席者】小林会長、吉川・大久保・山田各副会長、神長・佐藤各常務理事、勝山・中山・野口・大槻・山賀・直江・谷内各理事、平井・重廣各監事（直江理事は所用のため審議事項1は欠席）

【欠席者】落合・星理事

【審議事項】

1・秩父宮記念山岳賞の授与について

10月7日に開催された秩父宮記念山岳賞審査委員会で推薦された別添議案について審議した。

受賞候補者＝平出和也（当会会員）業績＝日本人初のピオレドールを受賞するなど、世界トップレベルの登攀活動を続けており、その登攀技術に加え独自の撮影技法を駆使して撮影した数々の映像は高い評価を得ている。（賛成12名、反対なしで承認）

2・マナスル登頂60周年記念事業ワーキンググループの設置について（小林）

「マナスル登頂60周年記念事業ワーキンググループ」を設置することについて別添資料により審議した。（賛成13名、反対なしで承認）

3・入会希望者承認について

22名の入会について別添資料により審議した。（賛成13名、反対なしで承認）

【協議事項】

1・国際委員会の設立の行程と目的について（吉川）

海外委員会とJAN編集委員会を統合し、新たに国際委員会を設立することについて、その任務と機能、設置までの行程を別添資料により協議した。

【報告事項】

1・平成27年度名誉会員の推薦については、9月末の期限までに推薦がなく、本年度は該当者なしとする。（小林）

2・後援名義・協力名義の使用申請のあった3件について承認した。（佐藤）

3・資料の貸出、撮影等の申請があった2件について承認した。（佐藤）

4・支部合同会議の開催状況について（佐藤）

9月26・27日に行われた支部合同会議における協議模様及び各支部の意見、要望等について報告があった。

5・入会申込書の連絡先にメールアドレス欄を新設することの報告があった。（佐藤）

6・関西支部80周年募金の結果について報告があった。（佐藤）

7・学生部海外登山隊募金の結果について報告があった。（吉川）

8・ネパール大地震救援募金の状況について報告があった。（佐藤）

9・電子国土賞２０１５に推薦し

た作品が1次審査を通過したとの報告があった。（佐藤）

10・創立110周年記念式典と平成27年度晩餐会の準備状況について（佐藤）

11・学生部男子登山隊のDzanyeザニェⅡ峰（6318m）登頂について（山田）

12・YOUTH　CLUBの最近の取組について（山田）

13・インドネシア・プロジェクトの報告（吉川）

創立110周年プロジェクトの一環である「インドネシア登山ガイドブック」出版計画の中止とスメル山登山の実施について報告があった。

14・冬山遭難防止対策セミナーの開催について（中山）

15・委員会主催山行における登山届の提出について（中山）

16・日本山岳会110周年記念御嶽山シンポジウムの開催について（野口）

17・ルーム看板の作成について（佐藤）

18・『山岳』第110年（2015年）の印刷ミスについて報告があった。（神長）

19・「山」10月号の発行について（神長）

平成27年度　第3回　初級登山教室指導者養成講習会
募　集　要　項

日本山岳会支部事業委員会

目　的　日本山岳会の活性化・会員増強の方策として登山教室の運営が注目されているところであるが、各支部での登山教室・リーダー育成のための支援事業の一つとして、冬山での初級者登山教室を開催する際に必要な知識と技術を学ぶための指導者養成講習会を開催する。登山歴の浅い会員を含めて支部のリーダーの育成を目的としており、冬山登山の素晴らしさと安全な登山を実践できる資質を具えた会員の増強を図るとともに、支部活動の一層の発展に資することを目的とする。

主　催　公益社団法人日本山岳会　支部事業委員会

日　時　平成28年３月５日（土）・６日（日）

場　所　安藤百福記念　自然体験活動指導者養成センター
長野県小諸市大久保1100　　ＪＲ小諸駅よりタクシー 10分

内　容
・冬山の天気・観天望気（仮題）　講師＝気象予報士・ヤマテン社長　猪熊　隆之氏
・冬山の安全管理　講師＝日本山岳ガイド協会ガイド（未定）
・初心者講習会運営の問題点（仮題）講師＝支部事業委員会委員（未定）
・懇親会

日　程　（予定）３月５日（土）13：00集合　開始式ののち講義ほか
３月６日（日）貸切バスを利用して車坂峠へ。黒班山登山による実技講習会
16：00百福センター帰着、16時30分解散

参加資格
・日本山岳会会員で、冬山登山のリーダーを目指す者
・山岳保険に加入している者

参加費　8000円（概算）　宿泊費・食事２食・現地交通費・資料代を含む
＊参加者の人数により現地交通費（貸切バス代）が変わる可能性あります

募集人数　25名

締切日　２月10日（水）定員になり次第締め切ります

申込み方法　別紙申込書に記載し、メールにて下記あてにお送りください

申込み／問合せ先　支部事業委員会・武藤篤生まで
eメール　dr.mutoh@gmail.com

その他
・参加を受付した方には、後日詳細なプログラムをお送りします
・スノーシューのレンタルがありますので、希望者はお申し込み下さい
・７日の黒斑山登山の昼食（行動食）は各自でご用意ください

【連絡事項】

1・スポーツ庁後援名義等の使用許可申請について

2・第16回ライチョウ会議静岡大会の開催

3・Wアルプスの会へのご招待

4・「川瀬巴水・吉田博木版画展」オープニング　11月8日㈰東御市丸山晩霞記念館

5・2015日本冒険フォーラム及び交流会の案内　11月22日㈰明治大学駿河台キャンパス

6・大阪アウトドアフェスティバル2016（2016年3月12日㈯、13日㈰）への出展案内

7・北海道支部50周年記念式典12月12日㈯15時30分～　札幌市

【今後の予定】

1・評議員懇談会の開催　10月27日㈫17時～　集会室

2・NMAアンツェリン会長の来訪　10月28日㈬15時～　集会室

3・冬山遭難防止対策セミナー　11月16日㈪19時～　東京体育館

4・110周年記念御嶽山シンポジウム　12月4日㈮18時～　慈恵医大髙木講堂

5・支部長会議の開催　12月5日㈯10時30分～12時30分
6・110周年記念式典・祝賀晩餐会の開催　12月5日㈯13時～受付開始

ルーム日誌 10月

1日　支部事業委員会　YOUTH CLUB
2日　YOUTH CLUB
5日　自然保護委員会　総務委員会　高尾の森づくりの会
6日　常務理事会　スケッチクラブ
7日　秩父宮記念山岳賞審査委員会　図書委員会　集会委員会　資料映像委員会
8日　日本山岳会再生委員会　国土地理院WG　フォトビデオクラブ　山岳地理クラブ　インドネシア登山隊
9日　「山の日」事業委員会　九五会
13日　自然保護委員会　山岳研究所運営委員会　スキークラブ　山想倶楽部
15日　理事会　科学委員会　緑爽会　三水会
16日　図書委員会　山の自然学研究会　みちのり山の会
19日　総務委員会　資料映像委員会　スケッチクラブ
20日　スキークラブ　休山会　マウンテンカルチャークラブ
21日　青年部　01会　つくも会　ゴジュンバ氷河調査隊
22日　学生部　山遊会　緑爽会
23日　総務委員会　フォトビデオクラブ
26日　総務委員会　110周年記念事業実行委員会　YOUTH CLUB SUN燦会
27日　評議員懇談会　デジタルメディア委員会　遭難対策委員会
28日　自然保護委員会　麗山会
29日　総務委員会　山行委員会　YOUTH CLUB　日本山岳会再生委員会
30日　財務委員会　総務委員会　公益法人運営委員会　学生部　二火会　フォトビデオクラブ

10月来室者　570名

会員異動（10月分）

物故

住吉仙也（4675）15・10・5
町田　悌（4881）15・8・20
田久保勇治（9864）15・10・11
内藤　勇（10047）15・10・10
西川雄策（11287）15・10・28

退会

大橋靖子（5171）宮城
渡部　衛（9031）福島
山口つぐお（11154）
橋本久美子（12377）
堀　浩明（14345）
野田英樹（14888）埼玉

INFORMATION インフォメーション

◆チベットの高層気象（猪熊隆之気象予報士による講演と懇親）

海外委員会

猪熊氏は中央大山岳部監督で、チベットの山やエベレスト西稜、剱岳北方稜線など、国内外の山々に足跡を記し、国内初の山岳気象専門会社を設立、多くの登山家から信頼を受けている。チベットやヒマラヤの気象変動が、近年激しいようだが、その原因は何か……興味深いお話です。

会場　日本山岳会ルーム
日時　12月19日㈯14～16時
費用　1000円（学生500円）
申込み　田口憲司
✉jktjapanjkt@yahoo.co.jp

◆スノートレックとスキー、湯の丸山

山行委員会

浅間山や四阿山、根子岳などの展望を楽しみ、なだらかな山容の山々をスノーシュー（レンタル有）で歩きます。スキー愛好家もご参加ください。チャーターバス利用で評判の休暇村鹿沢高原に宿泊。

日程　2月27日㈯～28日㈰1泊2日　集合＝27日JR新宿駅西口7時15分　解散＝28日JR新宿駅西口20時頃
費用　2万8000円（交通、宿泊、懇親会、傷害保険、雑費込）
最少催行人数13名
申込み　1月31日迄に植木淑美宛
FAX 042-734-1498
✉syukai@jac.or.jp

＊傷害保険加入のため、生年月日をお知らせください。

◆京都・滋賀支部創立30周年記念式典・記念交流登山

期日　2016（平成28）年4月23日㈯、24日㈰

場所　世界遺産比叡山延暦寺　山内延暦寺会館　〒520－0116　滋賀県大津市阪本本町比叡山（TEL077－578－0047）

参加　日本山岳会会員（支部友可）

費用　1万7000円（宿泊・祝賀会費等）

内容　《式典・講演会》4月23日㈯14：00～16：30①立山カルデラ砂防博物館・飯田肇氏②比叡山延暦寺千日回峰行者・上原行照大行

《祝賀会》4月23日㈯18：00～20：00

《記念登山》4月24日㈰比叡山回峰行の道を歩く

《観光等》4月24日㈰延暦寺会館で写経、座禅体験、延暦寺根本中堂等を観光。

申込み　氏名、性別、会員番号、住所、電話番号を明記の上、左記まで。〈問合せ、申込み先〉日本山岳会京都・滋賀支部事務局　中川　寛　〒617－0824　京都府長岡京市天神1－25－15　TEL090－8572－2010　FAX075－955－2590　✉fwkk4165@mb.infoweb.ne.jp

申込み期限は平成28年1月31日㈰。申込み者には詳細をご連絡します。

特別仕様
日本山岳会創立110周年記念
プロトレック頒布　申込み期限延長

カシオ計算機のご協力をいただき、プロトレック最新モデルを記念ウォッチとして頒布していますが、ご好評のため、申込み受付期限を12月31日まで延長いたします。
この機会に、ぜひお求めください。
＊詳細は「山」10月号または、日本山岳会ホームページをご覧ください。

◆創立110周年記念・ゴジュンバ氷河GLOF調査隊　説明会

「氷河を知ることの楽しさ」の説明会です。併せて調査隊の計画も説明します。氷河が好き、計画に関心がある、参加を考える、という方、気軽においで下さい。資料準備上、ご一報願えれば幸いです。

日時　12月14日㈪13時～16時

会場　日本山岳会会議室

問合せ先　✉zero@qb3.so-net.ne.jp　ゴジュンバ氷河GLOF調査隊　大森弘一郎

◆水越武写真展「真昼の星」

開催　第1部「天と地の間・日本アルプス」25点＝2月2日㈫～3月31日㈭　第2部「いのちの聖域・原生林」25点＝4月1日㈮～5月31日㈫

会場　FUJIFILM SQUARE（フジフイルムスクエア）写真歴史博物館　〒107－0052東京都港区赤坂9－7－3（東京ミッドタウン・ウェスト）　TEL03－6271－3350　URL http://fujifilmsquare

入場料　無料

主催＝富士フイルム株式会社　後援＝東京都港区教育委員会　協力＝公益社団法人日本山岳会、㈱山と溪谷社、㈱新潮社（予定）

❖編集後記❖

●柏編集長が長期、ネパール取材中のため、今月はピンチヒッターとして入稿作業をお手伝いした。ネパール大地震による復興は、被災中心地においてはまだまだのようだが、私たちにおなじみのエベレスト街道やアンナプルナ方面のトレッキング・ルートは、ほぼ平常どおりに復活しているという。

●山岳6団体による復興支援活動の呼びかけに多くの方々がご支援下さり、約2460万円（10月末現在）もの募金が集まった。復興にはまずお金が大切だが、ネパールの場合は、登山やトレッキングに出かけて外貨を落としてあげることこそ、いちばんの復興支援ではなかろうかと思う。会員の皆さんもぜひ、いまこそネパールへ。

（節田重節）

日本山岳会会報　山　846号

2015年（平成27年）11月20日発行
発行所　公益社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261-4433
FAX　東京(03)3261-4441
発行者　日本山岳会会長　小林政志
編集人　柏　澄子
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社